

必ず、『小野小町』の利(左馬頭作者)からコピーして下さい。
新しく文字を入力して、私にチェックさせないよう、お願いします。

第九十五章

小野小町

『小野小町』は、13ボテオ。

『新・ヤマト物語』第一巻に合わせて、13.5ボテに変更お願いいたします。

5,381 P

38

それは、小野良実が帰洛の勅命を蒙った承和七年(八四〇)から数年後の承和十二年(八四五)末ごろのことであつたろうか。それとも翌承和十三年(八四六)正月のこととだつたのだろうか。

小野良実(よしののけ)は、「大和守」(大和国の長官)に任命された。『鵬曉筆抄』(写本・静嘉堂文库蔵)に、何と、こう記されている。

「彼良実大和守になりて上洛し侍る時、近江国玉造庄にて独の少女に行逢り、則猶子(兄弟・親戚、または他人の子を養つて自分の子とすること)とせり、小町といふこれなり」といのである。(『小野小町』前田善子、三省堂、一四六頁参照)

あるいは、
〈出羽国から、新しい任地「大和国」へ赴くために「上洛」してきた良実(よしののけ)は、小野氏の本拠地「近江国」の玉造庄といふ所において一人の少女に行き逢つた。この少女こそ、小町であつた。良実(よしののけ)は、自分の娘である小町を、あえて猶子として引き取つた。

といった意味なのかも知れない。
しかしそれにしても、良実(よしののけ)は何故その少女「小町」を「猶子」(養子)としたのだろうか。

5388 P
5389 P
大和守の任命表
前上

詳しくは分らないが、もしかしたら、次のような訳があったのではなからうかと想像される。

衣通姫

先に述べた横山の麓にある『七国神社』のすぐ前には、清冽な水をたたえた『小野の泉水』と呼ばれる景勝の地があつて、……六歌仙のひとりとして有名な小野小町はこゝで生まれたといひ、この泉水の近くには、小町にまつわる伝承が数多く残されている。(熊本の伝説「荒木精之、角川書店、七二頁。「小町伝説」明川忠夫、現代創造社、一三九)

一四二頁参照)
小野良実は、流されるに當つて妻と娘『備前』を近江国もしくは妻の実家に残し、この肥後国の小野の里へ降つてきたのであるうか。

なお、『謡曲拾葉抄』〈卒都婆小町〉の條に、「小町が姉を備前といふ。古今集恋(歌五)の巻軸(巻物の終りの軸に近い所)の、

ながれては 妹背の山の なかに落つる
吉野の川の よしや世の中

(とどのつまりは、(吉野川の西岸で向かい合っている)妹山と背山の間に、吉野川が割り込んでくるのだ。それで

5,382P

39

『よし』とするのか、世の男と女たちよ
の歌、よみ人不知とあれ共、実は小町があね備前が歌なり。

古今素純抄に見えたり」

とあり、——小町の姉の呼名を「備前」となしている。

しかし、小町の姉が果たして備前であつたか否か、これだけの根據では、その眞偽を定めることは出来ないといふ。

(「小野小町」前田善子、三省堂、一五八頁参照)

なるほど、小町の姉が『備前』であつたかどうか詳らかでないが、

《そうでなかった》

とも言いきれないわけである。

この物語では、小町の姉を『備前』と呼ぶことにしよう。

良実は、流されてきた横山の麓の村において、……父

(實)や母や、妻や幼子(備前)の安否を気遣つた。

讒者(あしざまに告げ口をする人)の為め罪を得、当小野ノ里に謫居(流され場所)をト(うらない)し、配(島流し)在し、月を詠め、鴻雁(はくちょうや、かり)東に飛ぶ時は遥に帝顔を拝し、讒者の非義(義理にそむくこと)を憤

り、無量（はかり知れない程）の祈誓（神に対する誓い）を起し、七ヶ所の靈社を合せ祭った良実は、——あるいは、この七国神社の石段下の美しい泉水（小野泉水と呼ばれる）のほとりに佇んだ（~~のではなううか~~）。

この小野泉水は、丁度、勾玉のような形（見方によっては九州のような形）をしていて、今、植木町指定文化財とされている。

さて、そうした日々が続くうち、いつしか良実は、……美しい乙女に心をひかれるようになっていった。

その乙女は、全く確証のないことながらあえていえば、『七国神社』の神主（~~禰尊~~）の娘《巫女》であったか（~~上賀茂神社の神職者~~）。

容姿（顔だちと体つきと）が一際秀でていて、麗色が衣を通して照り輝くように思えるところから、……人々はそれを乙女のしとを、『衣通姫』と呼んでいた。（『古今集』仮名

序、真名序。群書類従第十六輯「古今和歌集目錄」参照）良実と衣通姫との恋の炎は、いっきに燃え上がった。そんな時、一人の仲を引き裂くような勅許が下った。

承和七年（八四〇）二月に帰洛の勅命を蒙った良実は、もはやこの地に留まっているわけにいかず、……衣通姫

5,383^P

と別れて、京へ帰帰っていた。

衣通姫は、良実を慕って泣いた。

もともと、この時（承和七年三月末か、四月初め頃）、まだ誰も気付いてはいなかったが、すでに衣通姫の腹中に良実の子が宿っていたのかも知れない。

一方、そのような事を知る由もない良実は、京へ着き、——しかる後に、拔擢されて『出羽守』となり、妻子を伴って任地の羽州へ赴いたのではなかるうか。

小町の誕生

衣通姫は、やがて、生まれながらにしてたえようもなく可愛らしい女の子を産んだ。

それは、……判断としないが、承和七年三月末頃から数えて十月十日ばかり後（約九ヶ月後）の承和八年（八四一）春のことであつたように想像される。

つまりこの物語では、

《小野小町は、承和八年（八四一）に生まれた》

と考えて話を進めていくことにしたい。

現在、肥後国合志の七国神社前に水をたたえる小野泉水のほとりには、由緒を記した立札があつて、次のようにい

小野泉水 (植木町指定文化財)

平安の昔女流歌人として又、絶世の美人として名高い小野小町の誕生の地で、この池の水を産湯に使ったと言い伝えられています。植木台地唯一の石灰岩露出地域であり、平安風のロマンスを秘めた静かなたたずまいは、一幅の絵を見る様です。

近くの小野村の集落の中には良実の墓と伝えられるものもあり、又北側の横山には鬼のいわや古墳もあります。昭和五〇年九月「植木の自然と歴史に親しむ会」と述べている。

※ ただし、ここにある『鬼のいわや古墳』(横山の中腹にある古墳)は、卑彌呼の墳墓ではあるまいと考えたい)ところで、小野小町が承和八年(八四一)に生まれたとすれば、この時、祖父篁(八〇二〜八五二)は四十歳だったことになる。

なお、先に引用したものに、
「孫をもつ祖父の(下限の)年齢は、常識的に四十歳ごろである」

という。(第九十四章「篁は、小町の祖父かどうかについて」

の項において既述。「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、四五〜

四六頁参照)

もしかしたら、

〈小野篁は三十歳台後半に早くも良実の娘『備前』の祖父となっていた。そして、篁四十歳の時に『小町』が生まれ

た

ということであつたらうか。

*

衣通姫は、その女の子を『小町』と呼んでいつくしんだ。諸書によれば、

①小町の『まち』の語源は、「まうちぎみ」で、神につかえるという意味である。(『世界大百科事典』平凡社「小野小町」参照)

②そして、『町』は、まつる(祭・祀)の語と同系であり、巫覡が降神・招魂の作法をして尊貴神(人)を「待ち斎く」とおなじ意義を兼該(兼ねそなえること)していた。

「待ちいづく」この内容は、訪れる神を待ち、祭祀し、饗応(供饌・共食、女性ならば神妻として奉仕)することのいっさいである。だから、神の憑りつく代表的な聖樹も「まつ(松)」と名づけられている。(「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、五一頁参照)

③また、『まち』という語は、もと区劃を示し、区劃され

た地域・建物などという。(『日本書紀』(四)日本古典文学大系、

岩波書店、四八〇頁、注三参照)

と、種々説示されている。

ともあれ『小町』は、神官の家に生まれ育ち、祖父・祖

母・母の強い影響を受けたように思われる。

後年、日照りが続いた時、小町のもとに「雨乞の和歌」

を詠むようにとの宣旨が下ったという。

幼少の頃からすでに、神に祈ることが身についていた小

町は、——雨乞のために作られた祭壇の前で、おごそかに

神に祈願し、歌を詠んだのであろうと推察される。(追っ

て詳述したい)

比古姫 (日子姫)

小野良実が身を寄せた里の小山『横山』の由来をそれと

なく知っている衣通姫の父母達は、輝くばかりに美しい孫

娘『小町』を見るにつけ、大いに感嘆して、

「日の御子の生まれ替わりであろうか」

と思い、……『日子姫』という愛称でも呼んだのかも知

れない。

●荒唐無稽だとしてもすれば無視されがちであるが、

大田如才、因幡姫

5,385

『古今和歌集目録』には小野小町について、

「出羽國郡司女。或云。母衣通姫云々。號^ス比右姫^{ヒサヒメ}云々」

とある。(群書類従第十六輯「古今和歌集目録」参照)

●もっとも、

「三十六歌仙絵巻に、『比古姫』とある事により、『比右姫』

は、『比古姫』の誤写であろう」

といわれている。(『小野小町』前田善子、三省堂、一五五頁

参照)

●但し、この当時の貴族の子女の公名は「何々子」と命名

するのを一般的としており、「何々姫」の例は、源潔姫・

源貞姫・藤原祐姫・藤原淑姫・藤原時姫等の少数に止ま

っている。

「思ふに、この比古姫もたとひ信じ得るとしても、公名で

はなく、幼少の頃の家庭に於ける愛称であつたと思はれる。

さすれば、他に(小町や比古姫の他に)公名がある筈であ

るが、今、その名を知る術はない」

という。(『小野小町』前田善子、三省堂、一五五頁参照)

小町の母『衣通姫』や、『小町』や、『比古姫』など、愛

称だつたのだろうか。

なお、~~比古姫~~ ^{比古姫} ~~はひこひめ~~ ^{ヒサヒメ}

＜小町は、「日の御子の姫君」という意味を込めて『日子

5571 171 4044

比古姫 (日子姫)

比古姫

右

右

姫』(比古姫)とも呼ばれたのだろう

と思われる。

それは、——七国神社の祭神『日御子』(天照大神)に

あやかろうとしてのことだったのではなかるうか、と想像

される。

良実と小町との出会い

母衣通姫は、我が娘が美しく育っていくのを見るにつけ

ても、哀れに思わずにはおれなかった。

「遠い出羽国においでになられたというあのお方に、文で

お知らせしようかしら」

とも思われたが、妻子のある良実のもとへ文を送りつけた

ら、どういふことになるものやらと案じられ、ためらわれ

るのだった。

→ ところが、そうこうしているうちに、さらに数年が飛ぶように過ぎ

去っていった。

「やはり、良実様のもとへ行かなければいけないのよ。良

実様に、この子をお引き合わせして、一目でも見ていただ

きたいわ」

こう思うと、もう矢も楯もたまず、衣通姫は小町の手

を引いて、東国のはての出羽国へと旅立った。

43

444c
45568c
45571
1747

5,386p

野の邑(大津市の北方約十六き)を訪ねた。

衣通姫は、途中、小野氏の本拠地である近江国滋賀郡小

野の邑(大津市の北方約十六き)を訪ねた。

すると邑長は、何と、こう言った。

「良実様は、出羽守から大和守へと御昇進されることになっ

た。もうしばらくの間、この小野の邑でお待ちなさるがよ

い。良実様は、羽州から船で越前国敦賀へお着きになった

後、きつと此処小野の邑にお立ち寄りになるでしようから」

すすめられるままに衣通姫は、小野の邑に滞在し、……

一日千秋の思いで待った。

因みに述べると、東北地方の平定がすんだころには、

日本全国に七十二国があり、それぞれに大國・上國・中国・

下國の等級がつけられていた。

大和・河内・近江・伊勢・上野・常陸・武蔵・上総・下

総・陸奥・越前・播磨・肥後

の十二ヶ国が大國であった。

大國とは、かならずしも土地が広かったり産物が多かっ

たりするだけで指定するものでなく、より政治的

に重要な国を指しているようである。「熊本の歴史」森

田誠一、山川出版社、三九頁参照(既述)

察するところ、

小野良実(としぎね)は、上国(じやうこく)出羽(でわ)国の守(かみ)から、大(お)国(こく)大和(やまと)国の守(かみ)へ昇

進(しん)したのであろう

と思われる。(「延喜式」虎尾俊哉、吉川弘文館、一四四頁

『延喜式』による行政区分図(参照)

なお、肥後(ひご)国は、初めは上国(じやうこく)『上国』であつたが、延暦(えんりやく)十四

年(七九五)西海道(さいかいどう)で唯一の『大(たい)国(こく)』~~也~~なつたという。

(熊本県の歴史「森田誠一、山川出版社、三九頁。「新・熊本
の歴史」②熊本日日新聞社、二一〇頁参照) ~~既述~~

*

こうして、小野(おの)の邑(むら)の人達(た)の温かい(あた)はからいにより、近

江(え)国(こく)玉造(たまづ)庄(じやう) (不明。あるいは琵琶湖(びわこ)北岸(きたがん)の「玉作(たまづ)神社(じんしゃ)」あた

りか)において、——衣通(えと)姫(ひめ)は、長年(ながねん)想(おも)ひ続(つづ)けてきた良実(よしぎね)

と再会(さいかい)した。

案内(あんない)されてやつてきた良実(としぎね)は、女(に)の子(こ)を連れ(よ)た女(に)人(にん)の姿(すがた)

を認(みと)めた。

「おお、そなたは、衣通(えと)姫(ひめ)ではないか」

「おなつかしゅうございます」

一人(ひとり)は手(て)をとりあい、胸(むね)を搔(か)いて、嬉(うれ)し涙(なみだ)にむせん

だ。

良実(としぎね)は、……あの切(せつ)なくも心(こころ)楽(たの)しい時(とき)を共(とも)に過(すご)した

5,387^P

衣通(えと)姫(ひめ)が、こんなにも慕(こ)つて、はるばる訪(たず)ねて来てくれた

(ことを喜(よろこ)んだ。

衣通(えと)姫(ひめ)も、長い長(なが)い空(うつろ)白(しろ)の時(とき)を埋(う)めるかのよう(よう)に、熱(あつ

思いを語(かた)つた。

「お別(わか)れした翌(あした)年(ねん)の春(はる)に、この子(こ)が生(う)まれたのですよ」

そして、衣通(えと)姫(ひめ)は、娘(むすめ)の手(て)をとりながら言(い)つた。

「良実(よしぎね)様(さま)、ほら、この子(こ)を御(ご)覧(らん)になつて下さい。目(め)もとな

ど、貴方(あなた)様(さま)にそっくりでございます。この子(こ)『小町(こまち)』をど

うか一目(ひとめ)見(み)ていただきたくて、ここまでやつて参(まゐ)りました」

衣通(えと)姫(ひめ)は、胸(むね)をついてこみ上げてくる嬉(うれ)しさに、さらに

涙(なみだ)した。

その子(こ)『小町(こまち)』は、年(ねん)の割(わり)にはしつかりした、なかなか

に美(うつく)しい女(に)の子(こ)だつた。

良実(としぎね)は、

この天賦(てんぷ)の麗質(れいしつ)を備(そな)えた我(われ)が娘(むすめ)を、遠(とほ)い鄙(ひな)の地(ち)に埋(う)もれ

させてしまうのは惜(おぼ)しい

と思(おも)つた。

とはいえ、良実(としぎね)の心(こころ)の内(うち)には、少なからぬ戸惑(とまど)いがあつ

た。

《若(わか)さ故(ゆゑ)とはいえ、……流罪(りゆうざい)の身(み)でありながら生(う)ませた我(われ)

が子(こ)『小町(こまち)』の如(ごと)くについて、どのように公(こう)に釈明(しゃくめい)したら

よいものだろうか

と迷った。

そして考えたあげく、小野良実、我が子『小町』を『猶子』(養子)として引き取り、我が子として育てることとしたように推察される。

もしも事の真相が知られたならば、口うるさい都人達は、

「肥後国に流された時、表向き神妙に祈誓を起こし、七ヶ

所の靈社を合わせ祭ったりしながら、……裏ではこともあ

るうに、女に子供を産ませていたのだな」

「ほんとに、お笑い種ね」

などと噂しあい、……やがて、尾鱈のついた話が広まって

ゆくに違いない。

しかしながら、

『小町』を『猶子』(養子)として引き取るならば、あや

しむ者など居まい」

と思われたのであろう。

先に述べたように『搦鴨晁筆抄』(写本・静嘉堂文庫蔵)

には、

「彼良実大和守になりて上落し侍る時、近江国玉造庄にて

独の少女に行逢り、則猶子(養子)とせり、小町といふこ

れなり」

5,388^P

45

(参照)

・なおここに、

「彼良実大和守になりて上落し侍る時、云々」

と述べられていて、注目される。

この文章は、

〈都から離れた所に居た良実が、大和守に任命されて、平

安京へ上ってきた〉

ことを示している。

・もっとも、肥後国に流されていた良実が、いきなり大和

『大和国』の守に任命されて上落したとは考えにくい。

■なるほど定かではないが、この物語では

〈都から遠い出羽国に居た良実が、大和守に任命されて、

平安京へ上ってきた〉

と解釈してみたい。

・すなわち、

《小野良実、大和守に任命され、出羽国から平安京へ上

落する途中、……近江国玉造庄にて小町と行逢い、則猶子

(養子)とした》

という意味なのであろう、と想察される。

■なお、

と記されている。「小野小町」前田養子、三省堂、一四六頁

5381^{8代}

114頁 官位表
846 27
839 220
4 7

● 小野篁の次男良実(よしのけ じなん りょうじ)は、もしも承和六年(八三九)に二十歳であつたとすると、……大和守に着任したと思われる承和十三年(八四六)当時、二十七歳となつていた勘定になる。(第九十四章<小野良実の官職について>の項参照)

● 出羽守としての経験をもつ二十七歳となつた小野良実が『大和守』に抜擢されたといふのであれば、首肯し得るようには思われる。

*

先に、第九十四章<小野良実の官職について>の項において、

「小野良実(よしのけ りょうじ)は、承和七年(八四〇)末以降に出羽守となり、……承和十三年(八四六)正月十三日以前まで、その任についていたのかも知れない」

と述べた。

それでは、

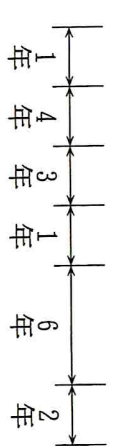
<小野良実(よしのけ りょうじ)は、承和十三年正月頃、大和守に任命された>と考え得るのだろうか。

■ ここにまず、承和七年(八四〇)三月に良実が帰洛の勅命を蒙つた時点以降の、『大和守』の任命記事を検討してみよう。(『六国史索引』目吉川弘文館<大和守>参照)

5,389 P

46

- (3) —————
- ① 承和八年(八四一)正月十三日。正躬王任。
 - ② 承和十年(八四三)正月十一日。紀長江任。
-
- ④ 嘉祥二年(八四九)七月一日。清瀧河根任。
 - ⑤ 嘉祥三年(八五〇)五月十七日。丹堀門成任。
 - ⑥ 仁寿三年(八五三)四月十日。豊前王任。
 - ⑦ 天安元年(八五七)正月十四日。安倍貞行任。
 - ⑧ 天安二年(八五八)二月二十八日。藤原氏雄任。



■ 以上の通りであつて、ここに注目されるのは、<②~④の間が六年間もあり、少々長い>ということである。

■ 参考までに述べる、国司制について、こう説示されている。

「国司は律令制下の地方官。守・介・掾・目の四等官があり、その下に史生・国博士・国医師がいた。これらの定員と官位相当は、第8表のように、国の等級によつて異なる。いた。

任期は、大宝令では六年、慶雲三年(七〇六)格で四年とされた。藤原仲麻呂(なかつまろ)の政權下で一時期六年とされたが、ほとんどの時期は四年であつた。しかし現実には、平均して二年半程度で交替していったらしい」

「小野良実」で
最初のみ

→ 前項下未6桁と合わせると0

第57表 養老令における国司の定員と官位相当

	大 国	上 国	中 国	下 国
守 介	従五位上 1	従五位下 1	正六位下 1	従六位下 1
大 少	正六位下 1	従六位上 1	—	—
掾	正七位上 1	従七位上 1	正八位上 1	—
大 少	従七位下 1	—	—	—
目	従八位上 1	従八位下 1	大初位下 1	少初位上 1
大 少	従八位下 1	—	—	—
史生	3(4)	3(3)	3(2)	3(2)
国博士	1	1	1	1
国医師	1	1	1	1

(1~4国に1)

() は728年(神亀5)の改正による定員

5,390^P

という。(『日本史辞典』東京創元社〈国司制〉参照)

■そこで、この物語では、仮りに、——小野良実(としかね)は、父小野篁の昇進にともなって異例の出世をし、

●承和十三年(八四六)正月ころ、出羽守から大和守に抜

擢され、

●そして、嘉祥二年(八四九)七月一日ころ、大和守から

さらに上位の位階へ昇進した、

と想定したい。

●なお、すでに述べたように、大和国は『大國』とされて

いたので、

〈大和守小野良実(としかね)は、従五位上相当であつた〉

ということになる。(第57表参照)

■とはいえ、後世(としかね)故あって、

〈小野小町の出生にまつわる事実の多くが抹消されること

となり、——父良実の経歴などの全てが歴史書から削除さ

れたのである〉

と思われる。

*

ところで、現在、近江国伊香郡木之本町千田(余呉湖の

東南約三き)に、『石作神社・玉作神社』という神社があ

る。(『日本社寺大観』神社編、名著刊行会、二六九頁参照)

54580 一冊

129^P 126^P 125^P 下

『石作神社・玉作神社』の社伝によると、

「創祀年代詳ならずるも、『三代実録』清和天皇の貞観

七年三月二十八日条に『伊香の孝子石作部廣繼の女』等と

見えたるを以てすれば、此地石作部氏の住所にして、其族

が祖神を祀りしに起原せるものなるべし。醍醐天皇延喜の

制小社に列す。当時石作神社、玉作神社各一社あり。後、

合して一社となれり。云々」

という。

■あるいは、

冊538頁上
124行

くもともと、『玉造庄』および『玉作神社』は、敦賀と琵琶

湖北端を結ぶ街道沿い（伊香郡内）にあったが、——あ

る時、現在地の石作神社と合わせて一社とした」

ということなだろうか。

あえて述べる、伊香郡西浅井村の大浦川中流域に「庄

村」がある。

■しかしながら、

〈『玉作神社』は当初から現在地（近江国伊香郡木之本町千

田）の近傍にあり、『玉造庄』もこのあたりにあった」

のかも知れない。

■もっとも、『石作神社・玉作神社』の現在地は、羽州か

ら敦賀を経て琵琶湖西岸の「小野の邑」へ向かう道筋から

少しばかり《東へ》ずれた所に位置している。

もしかしたら、良実と衣通姫との再会に当っては、……

小野の邑の人々の「良実の妻への気遣い」があったのでは

なからうか。

■恐らく、

〈小野の邑の人達は、良実をそと『玉造庄』へ連れてい

て、密かに衣通姫に引き合わせたの（~~だ~~）らう。〉

と想像される。

都での噂

良実は、あれこれ理由をつけ、『小町』を猶子（養子）と

して引き取った。

ところがそれでも、小町のまばゆいばかりの美しさに見

とれて目を丸くした都人達は、なにかと詮索し、噂をせず

にはおれなかった。

「出羽守として出羽国へ行っておいでになった間に、あん

なにも可愛い娘子をもつて、都に帰っていらっしやった。

見れば見るほどうっとりするような女の子ですこと」

「ほんとにねえ、目の醒めるような容姿だわ。これから、

もっともっと綺麗になっていくのでしょうね」

「でもね。……私噂に聞いたことなんだけど、良実様が出

羽郡司だった時に、領地の女に生ませたんですってよ。本
当かしら」

「あら、あの子は実の子じゃないみたいよ。近江国で養子
にしたっていう話よ」

「まあそんなの。わたしは今迄、肥後国の配流先で生まれ
た子だとはかり思っていたわ。だってあの子は『ひこ姫』
とも呼ばれているでしょう。『肥後姫』の意味だと思っじゃ
ないの」

「そうよ、私もそう思っていたわ。上の子が『備前』でしょ。
だって下の子は『肥後』だと思っわよねえ。でも、……
どうして下の子にだけ『姫』をつけて呼ぶのかしら。少し

おかしいわね」

篁や、良実ばかりでなく、小町自身さえも、この真相
については決してあかさうとしなかった為、……いよいよ
人々の噂話に枝葉がついて、広まっていたように想像さ
れる。

小町の素養

出羽国から、近江国を経て上洛した良実は、朝廷での正
式な任命を待つ間、……平安京の篁の邸宅に留まっていた、
と考えてみたい。

5392^p

〔※〕因みに述べると、西国巡礼第十七番札所「六波羅蜜
寺」の東北方すく、八坂の塔寄りに『小野篁卿舊跡』と刻

んだ石碑が立てられている。〔~~西国巡礼~~ 195 参照〕
篁もまた、あどけないながらもなかなか利発な孫娘を得
て、大いに喜んだに違いない。

なお、博学・能文・能書ぶりについて「当時の本識なり」
とたたえられ、「文章は天下無双、草隸（草書）は二王に
譲らず」といわれたほどの篁は、――自ら手をとるように
して、己の罪が遠因となって生まれた孫娘小町に、将来

必要になると思われるさまざまなことを教え込んだのかも
知れない。

一方、たぐいまれな資質に恵まれた小町は、驚くばかり
の早さで数多くの学問・芸術等の悉くを実になんなく覚え
込み、高度な知識さえも吸収、習得していったのであろう。
「ゆくゆくは、宮中に仕えさせるつもりの小町を、大和国
へ連れて行くのはよくない」

大和守となった小野良実は、大和国の任地へおもむくに
際し、――孫娘にかりきりになっている父篁のあしき
小町を預けたのではあるまいか。

こうして小町は、京に居て、

「京風の雅」

・カラー
 ・右側の坂
 右側(1/4)
 に、大さ
 はみみ
 載せたい。

5,393^P



1429 写真図版 795

『小野篁卿舊跡』の石碑 (右は著者)

ネカハは
 5-122
 1602
 に代
 1711
 大か
 1851^P
 墓
 跡

の中にその幼い日々を過ごしたように推察される。

小町は、祖父篁の家において、日々厳しい教育を受け、
習字・和歌・音曲等々恥しくない素養を身につけ、……起
居振舞も艶やかに、言葉遣いも優雅に、磨きがかけれ育っ
ていったのだろう。

篁の病

●小野良実が大和守になったのは、仁明天皇の承和十三年
(八四六)正月頃のことであつたらうか。(既述)

●そして、翌年の承和十四年(八四七)正月十二日に、小
野篁は参議となった。(第九十四章〈小野篁の子、良実〉の
項において既述)

●それから二年後、——仁明天皇の嘉祥二年(八四九)五
月に病を得て官を辞した篁は、家に引きこもり、静養する
こととなったようである。

記録が少々乱れているが、小野篁について、こう記され
ている。

①『文徳実録』仁寿二年(八五二)十二月二十一日条〔新
訂増補国史大系〕の篁伝に、

〔承和〕十五年(八四八)春正月、
信濃守。夏四月又兼勸解由長官。兼
左大弁。兼

5,394^P

●仁寿二年(後文からみて、嘉祥元年の誤りであらうという。
嘉祥元年は承和十五年と同年)春正月転左大弁。餘皆
如故。明年(嘉祥二年。八四九)春正月加従四位上。
夏五月以病辞官。帰家。三年(八五〇)四月加
正四位下。

仁寿元年(八五一)春正月遷授近江守。明年(八五
二)春病瘳。復爲左大弁。後又病発。不朝。

天皇深爲矜憐(あわれむこと)、數遣使者、趣視病根、
賚賜錢穀。冬十二月就家、敍従三位。及困
篤、命諸子曰。氣絶則殯(はな)り。莫令^{人に知らしむな}人知^{かれ}。

篁身長六尺二寸(約一八八センチ)。家素清貧。事母至
孝。公俸所、當皆施親友。

②『古今和歌集目錄』〔新校群書類従巻第二百八十五〕に、
小野朝臣篁。

廿五年(承和十五年の誤り)正月十三日左大弁。兼信
濃守。四月三日勸解由長官。

嘉祥三年(後文からみて、嘉祥二年の誤りであらう。八四
九)正月十日従四位上。五月以病辞官、停左大

弁。三年(八五〇)四月十七日正四位下。十月停勸解由長官。四年
三年四月十七日正四位下。十月停勸解由長官。四年

(八五二)正月十一日兼_ル近江守_ヲ。

仁寿二年(八五二)春病瘳_{病気がなおる}後任_ス左大弁_ニ。十

二月十九日従三位。十二月廿二日薨_ス。歳五十一。

とある。

■ここに、①と②の二つの記事を突き合わせてみると、嘉

祥二年(八四九)五月以後の篁の経歴、および病状は、次

の通りであつたように思われる。

●嘉祥二年(八四九)五月、

「以_テ病_ヲ辞_シ官_ヲ、帰_ル家_ニ」

「以_テ病_ヲ辞_シ官_ヲ、停_ル左大弁_ニ」

●嘉祥二年(八五〇)四月十七日(文徳天皇即位の日)、

「加_シ正四位下_ヲ」

「正四位下」

●嘉祥三年(八五〇)十月、

「停_ル大弁_ニ」「停_ル勘解由長官_ニ」

●仁寿元年(八五二)正月十一日、

「遥_シ授_ル近江守_ニ」

「兼_ル近江守_ニ」

●仁寿二年(八五二)春、

「病瘳_{病気がなおる}」復_タ爲_ル左大弁_ニ」

「病瘳後任_ス左大弁_ニ」

5,395^p

●仁寿二年(八五二)春以後のある時、

「後又病_ヲ発_シ不_レ朝_{朝(用ます)}」(文徳)天皇深_ク爲_シ矜憐_ヲ、數遣_シ

使者_ヲ、趣_シ視_シ病根_ヲ、資_ニ賜_ニ錢穀_ニ」

●仁寿二年(八五二)十二月十九日、およびその後、

「就_キ家_ニ、敘_ス従三位_ヲ。及_ビ困篤_ニ、命_メ諸子_ニ曰_ハ。

氣絶則殮_{人(そくれん)に知らしむなかれ}。莫_レ令_ニ人知_ニ」

「従三位」

●仁寿二年(八五二)十二月十二日、

「薨_ス時年五十一」——前頁下11行

「薨_ス。歳五十一」——この頁上3行

■この物語においては仮りに、小野篁は、

●嘉祥二年(八四九)五月に、病を以_テて官を辞し、左大

弁を停めた時から、——明年の嘉祥三年(八五〇)四月十

七日に、正四位下とされるまでの約一年間、

●および、同年の嘉祥三年十月に、(左)大弁・勘解由長

官を停めた時から、——仁寿二年(八五二)春に、病がな

おつて、左大弁に復帰するまでの一年余の間、

自宅療養してゐたのであらう、と考_ヒえてみるに_ハたい。

篁は、その間、家に居て、寝たり起きたりの日々を過_スこ

してゐたのではなからうか。

仁明朝末年の嘉祥三年(八五〇)当時、篁は四十九歳だつ

⑤ 5427^p 下 13行

850167
8417
69

た。孫娘の小町は、丁度十歳であつたらうと思われる。
そして祖父簗(竹やぶの意)に多くを学んだこの時期こ
そ、後の小町に大きな影響を与えたものと推察される。

(後述)

■なお、

〈姉『備前』が、小町と共に祖父簗を師としたのかどうか〉
については分らない。

■また、

〈母『衣通姫』が、京都、もしくは大和国に住んだのか、
……それとも故郷(肥後国)へ帰つていったのか、あるいは
小野氏の本地である近江国滋賀郡小野の邑に居住した
のか〉
などといったことについても、詳らかでない。

●しかし、あえて述べると、

(1)母衣通姫が、小町と共に同じ邸内に住んだのでは、――
小町が甘えて、教育の妨げになるう。
衣通姫と小町とが、京都の小野簗の家に同居したとは考
えにくい。

(2)大和守小野良実の邸宅には、正妻が居たに違いない。
衣通姫が、小町と離れて、大和国に住むのはつらいこと

5396^P

であらう。

(3)小町を小野良実に渡した衣通姫が、遥かに遠い肥後国へ、
一人で帰つていったとも想像しにくい。

小野良実とは、衣通姫と小町とを引き裂くような、そんな
無情なことをした筈があるまい、と思われる。

●そこでこの物語では、

〈衣通姫は、近江国滋賀郡小野の邑に住み、良実がときお
り訪ねてくるのを待ちわびたのだらう〉

と考えてみたい。

●母衣通姫が、京都からそんなに離れていない近江国の小
野の邑に居て、見守つていたから、……小町は、安心して、
種々のならいごとに心を打ち込むことができたのではなか
らうか、と想到される。

良岑宗貞(僧正遍昭)の出家

仁明天皇(八一〇〜八五〇)が崩御されたのは、嘉祥三
年(八五〇)三月十一日のことであつた。

左近少将良岑宗貞(後の僧正遍昭)は、それまで恩寵を
たまわつた仁明天皇の崩御を契機に、――七日後の三月二

十八日に出家した。
●『文徳実録』嘉祥三年三月二十八日条に、

「左近衛少将従五位上良岑朝臣宗貞。出家シ爲ル僧ナリ。宗貞。先皇之寵臣也。先皇崩後。哀慕無レ己（おのれ）。自ラ帰ニ仏理一。以求ニ報恩一。時、人慰ム焉」

とある。
●また、『三代実録』仁和元年（八八五）二月十三日条の『權僧正法印大和尚位遍昭の上表文』では、遍昭は出家當時を回顧して、

「小僧初ニ剃レ髮之日。心ニ誓テ自ラ謂フ。鏟ニ跡一俗間一。終ニ命一山窟ニ」

と決意した由を述べている。（小野小町攷「小林茂美、桜楓社、二二七―二九頁参照）

●そして『大和物語』一六八段には、

「この帝（仁明天皇）うせ給ひぬ。御葬の夜、御供にみな人つかうまつりける中に、その夜よりこの良少将うせにけり。とむだち・妻も『いかならむ』とて、しばしはここかしこ求むれども、音耳にもきこえず。……（中略）……初ニ瀬一の御寺（長谷寺）にこの妻まうでにけり。この少将は法師になりて、蓑ひとつをうちきて、世間世界を行ひおりきて、初瀬の御寺に行ふほどになむありける」

とある。
尚、良少将とは、少将良岑宗貞のことである。

5.397^P

●一方、『古今集』卷十六―八四七の僧正遍昭の歌の詞書には、

「仁明天皇の御代に蔵人頭として昼夜帝の身近にお仕へ（し）ていたが、帝が亡くなって世は諍闇（天子が父母の喪に服する期間）になってしまった。以来、世間（きあい）を全く絶ち、比叡山に登って頭をおろしてしまった」

とある。（「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、三三二頁の〈注解〉参照）

*

少将良岑宗貞（遍昭）は、仁明天皇崩御以来、世間づきあいを全く絶ち、法師になって、蓑ひとつをうちきて、世間世界を修行してまわり、初瀬の御寺（長谷寺）などを渡り歩き、〈その後〉比叡山に登ったのかも知れない。

■予め述べると、この物語では、
仁明天皇が崩御された嘉祥三年（八五〇）三月二十一日の七日後の三月二十八日に出家した遍昭は、先ず布留の『石上寺』へ行き、一年後の仁寿元年三月二十一日（仁明天皇の忌明けの日）の直後に『石上寺』から失せ、……『清水寺』へ行き、さらに『長谷寺』で修行し、その後の斉衡二年（八五五）五月、比叡山に登った

と考えてみたい。

1107 130¹ 本 344
⑦ 5402¹

■なお、奈良市と桜井市との中間に位置している山辺郡石上郷大字布留は、良岑宗貞（遍昭）と非常に深いかかわりがあったようである。

■だが、そのようなこまごました詳細については、追って述べることにしよう。

大和国への旅

文徳天皇（八二七～八五八）は、仁明天皇の第一皇子で、父仁明天皇が崩御された嘉祥三年（八五〇）三月二十一日の翌月、四月十七日に大極殿に於て即位された。（文徳実

録）

文徳天皇即位のその日、つまり嘉祥三年（八五〇）四月十七日に、小野篁の位階は正四位下とされた。

ところが、その約半年後の十月頃、篁の病状は再び悪化したのであろう。

同年十月、篁は、大弁（左大弁）を止め、勘解由長官も止めた。

しかし、その後、篁の病はかなりよくなっていったよう

に思われる。

仁寿元年（八五一）正月十一日には、近江守を兼ねて復

帰することになっていた。

5,398^P

55

この仁寿元年（八五一）正月、祖父篁は、

「皆で、大和国へ行こう」

と言い出した。ではなにか、

「まあ嬉しいわ。わたし、どの着物を着てゆこうかしら」

小町は、祖父や父と共に旅に出かけることを、大いに喜

んだ。

かつて大和守であった良実にとっても、大和国は思い出

深い、なつかしい所であった。

■なお、『古事記』の孝昭天皇段によれば、孝昭天皇の皇

子、天押帶日子命を祖と仰ぐ同族氏族として、春日臣（も

と和爾臣と称した）・大宅臣・栗田臣・小野臣・柿本臣など

がみえており、——これらの氏族を、今日では一般に、

和珥系氏族と呼び慣わしている。

■和珥氏は、もともと奈良盆地東北部に居住していた古代

豪族である。

●天理市機本町和爾には、『式内和奈坐赤坂比古神社』が

鎮座している。

●また、そのすぐ南に近接する東大寺山の麓には、『式内

和奈下神社』がある。

●小野氏は、和珥氏の一族として、奈良盆地東北部や、近

江国滋賀郡小野村などに分布した、

⑤ 5401^P 上末54
⑥ 5,403^P 上44

→ 和奈下 344

という。(「日本史辞典」東京創元社〈和珉氏〉〈小野氏〉参照)

■そして又、

「遣隋使・小野妹子の孫にあたる小野毛野が建てた小野氏の氏寺『願興寺』の跡とみられる白鳳時代(七世紀末から八世紀初めに創建)の寺院の塔基壇跡が、——奈良県天理市和爾町の農地から出土した」

という。

奈良県立橿原考古学研究所の発表によると、

●人の頭大の自然石を四辺に積んだ正方形の基壇で、一辺十二・七メートルの上段と、一辺十四メートルの下段の二重になっている。規模などから、五重塔跡とみられる。

●基壇の南側には幅約五メートル、北側にも幅約二メートルの玉石敷きの参道があり、塔の周囲には一辺約三十四メートルの土塀跡もある。

だ。

●寺域は、南北約百七十メートル、東西約百三十メートルと推定している。

る、

という。「朝日新聞」平成九年四月十一日付〈小野妹子の孫

が建立、願興寺?の塔跡出土〉参照)

あるいは、篁は、残る命の短いことを察して、小野氏の元来の本拠地というべき奈良盆地東北部を訪ね、小野氏の興隆を祈願したいと思ったのかも知れない。

5,399P

孝昭天皇と敏達天皇

第13巻

56

●先述のように、孝昭記には、

「孝昭天皇の皇子天押帯日子命は、春日臣・小野臣・柿本臣らの祖先である」

と記されている。

●とはいえ一方、『大系図』『尊卑分脈』および統群書類

従『小野氏系図』(その三)には、

「敏達天皇—春日皇子(敏達天皇の皇子)—妹子—拳守—篁……」

とされるされている。

●つまり、小野氏の祖先は、『孝昭天皇』なのか、それとも『敏達天皇』なのか、分らないわけである。

●しかしながら、第1表により、次のように対比して考え

てみたい。

①「神武—綏靖—安寧—懿德—孝昭……」

②「継体—安閑—宣化—欽明—敏達……」

ここに、孝昭天皇と敏達天皇とが、まさしく同等の順位に並ぶことが分かる。

●もしかしたら、

〈小野臣や柿本臣らの祖先は孝昭天皇であるにもかかわら

＊妹と孝昭との間を
大きく離しておきたい。

3字分の

ず、——『大系図』『尊卑分脈』および統群書類従『小野氏系図』(その三)の執筆者達は、あえて、ついついつかり間違えたこととして「孝昭天皇に相当すると考えられる」敏達天皇の名をかかげた

というやや強引な次第なのかも知れない。(参考丸の冒頭部)

(分参照)

●なるほど証拠立てるものはむづかしいが、この物語では、

〈小野臣や柿本臣らの祖先は、——欽明天皇(在位五三〇頃〜五七一)あるいは敏達天皇(在位五七二〜五八五)とほぼ同時期の日辺日本国(近畿地方)の孝昭天皇であつたらう

と考えたい。(第八十四章〈柿本人麿の苦悩〉の項において既

述。第1表参照)

●すなわち、

〈小野氏の祖先は、東の日辺日本国(近畿地方)の『孝昭天皇』の皇子天押帯日子命に溯るのだらう〉

と思われる。

石上寺

篁が率いる一行は、船に乗って泉川(木津川)を溯り、輿に乗り替えて奈良山を越え、平城において大和守丹墀門

5,400^p

57

のではなからうか。成に迎えられることであつたらうか。

そして翌日、篁・良実らは、牛車を連らねてにぎにぎしく平城から南下していったように想像される。

篁・良実・小町ら小野氏一族は、天理市標本町和爾の『式内和坐赤坂比古神社』および『式内和余下神社』に

参拝し、小野氏の氏寺として建てられた『願興寺』に詣で

た後、……あるいは、さらに足を伸して布留の『石上神宮』

へとやってきたことだらうか。

こうしてやがて、篁らは、布留の『石上寺』へ到つたの

であるう、と考えてみたい。

なお、『後撰和歌集』・『小町集』が主張する『石上寺』

の寺址については、

①山辺郡石上郷大字石上の在原山本光明寺(又の名を磯上寺という)とする説、

②山辺郡石上郷大字布留にあつた良峰石上寺とする説、

の二つの説がある。

■前者について、『名跡幽考』は在原業平の住居跡といひ、『広益俗説弁』は業平の葬地といふ。

■後者の良峰石上寺について、『名所図会』・『大和志』などは、別名を良峰寺・良因寺とも称している。

良岑宗貞(遍昭)及びその子素性法師(俗名玄利、別称

890 75
816 1
74 412
85

良因朝臣)の名をとって、『良峰寺』・『良因寺』と呼ぶようになったのであろうか。

この良峰石上寺(更に別名、今宵薬師堂ともいう)には、

—天長年中(八二四〜八三四)善守法師が住持し、のち

通昭、その子ら由性(少僧都、雲林寺・延暦寺别当)・素性

(俗名玄利、別称が良因朝臣、左近将監、出家後権律師)が幽

居したと記されている。(「小野小町致」小林茂美、桜楓社、

二五九頁。「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版、九七七頁

〈丹波市〉「古の石上郷」(参照)

ともあれ、篁らは、……偶然にも、当時通昭が修行中で

あったと思われる『石上寺』へやってきたように推察され

る。(「後撰和歌集」参照。後述)

時康親王(後の光孝天皇)と、

良岑宗貞(後の僧正通昭)との深い絆

それでは、小町と通昭との贈答歌について述べる前に、……

良岑宗貞(僧正通昭)の幼少時代以降、文徳天皇の仁寿元

年(八五一)正月までの経緯を、振り返って見ておくこと

にしよう。

良岑宗貞の生年については、嵯峨天皇の弘仁五年、同六

年、同七年と二説あるが、

5,401P

「光孝天皇の仁和元年(八八五)十二月十八日七十賀」

(三代実録)

から逆算すると、弘仁七年(八一六)生まれとなり、『皇

胤紹運録』と一致するので、通常、これが基本とされてい

る。(「小野小町」前田善子、三省堂、一七二頁。「広辞苑」

〈通昭・通昭〉(参照)

そこで、良岑宗貞(通昭)は、八一六年に生まれ、八九

〇年七十五歳で没したと考えてみたい。

*

桓武天皇の皇子良岑安世(正三位大納言右大将)の子と

して生まれた宗貞は、少年時代を奈良県の石上あたりで過

ごしたようである。

なお、通昭の母の宅址が石上にあったと、『大和志』が

伝えている。

また、通昭の歌に、大和なにし石上がしばしば出てくる。

こうしたことから、

〈幼少時の良岑宗貞は、石上のほとりで過ごしたろう〉

と目崎徳衛氏はいう。

さらに、布留の石上寺が良峰寺・良因寺と呼ばれ、通昭・

由性・素性の幽居も伝えられているからには、——そこが、

通昭等良岑氏にとって、古いゆかりのある場所であったこ

885 701
816 69
69

すなわち、

《遍昭は、仁明天皇がお亡くなりになった嘉祥二年（八五〇）三月頃から、簗・小町らが和国へやってきたと思われ、翌仁寿元年（八五一）の正月を過ぎた頃までは、『石上寺』で起居し、修行していた》

と仮定したい。

さて、仁明天皇の第三皇子時康親王（後の光孝天皇）が、布留へとおいでになったのは、——もしかしたら、嘉祥三年（八五〇）秋のことであつたらうか。

この時、

《時康親王は、布留の滝を遊覧し、幼い日々を過ごした地を懐かしく散策した後、……かつて、乳母として仕えてくれていた遍昭の母の家をお訪ねになったのであらう》

と拝察される。

時康親王（後の光孝天皇）は、布留の滝を遊覧された際、遍昭の母の家に投宿（宿をとること）されたとい、——その折りに、遍昭がおもてなしし、詠んで奉ったとされる献詠歌が、『古今集』および群書類従本『遍昭集』にみえる。

『古今集』卷四一一四八には、こう記されている。

仁和帝（光孝天皇）、親王におはしましける時、布留の

5,403P

ない。

■そして、群書類従本『遍昭集』にもほぼ同様のことが記

る。

でございます。なものであつたらうが、それを謙遜して歌っているのではあ

（遍昭の母）も年老いてしまった住まいだからなのでございましょう。庭といわず、垣根といわず、一面の秋の野良

庭もまがきも秋の野らなる里はあれて人はふりにし宿なれや

僧正遍昭

あらう）のついでによりて奉りける。

滝御覽ぜむとおはしましける道に、遍昭が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野につくりて、御物語（昔の思ひ出話などのことである。時康親王が乳呑児の頃の話で

はかりに頼もしく成人なされたその《麗しい御様子》を拝いし……乳母（遍昭の母）は、いたく感動していたに違いない。

前記850年に
光孝20年 遍昭35才

たのではな

されている。

仁(に)和(わ)のみかとのまたみこにおは(は)しまし時(とき)ふるのたき御

覧(らん)せんとておは(は)しましけるみちに遍昭(へんしょう)ははの家侍(けさむらい)りける

に庭(にわ)を秋野(あきの)につくりていとおかしう御物(ごもの)かたりのついで

によみたてまつりし

里(さと)はあれて人(ひと)はふりにし宿(しゆく)なれや

庭(にわ)も籬(かき)も秋(あき)の野(の)となる

「時康親王(ときやす)が、布留(ふる)の滝(たき)を御覧(ごらん)になるために、この里(さと)へお

いでになった」

と聞いた遍昭(へんしょう)は、『石上寺(いそのかみでら)』から母(はは)の家(うち)へかけつけ、庭(にわ)や

籬(かき)を秋(あき)の風情(ふうせい)のあるものにして出迎(でむか)え、昔(むかし)の懐(なつ)かしい思い

出話(しゅわ)などでおもてなしをし、歌(うた)を作(つく)って奉(ほう)ったものと思(おも)わ

れる。

そして、これ(これ)が大きなきっかけ(かけ)になって、時康親王(ときやす)王(わう)(光

孝(きょう)天皇(てんわう)と遍昭(へんしょう)とは、強い絆(きずな)で結(むす)ばれたのであろう、と想

到(いた)される。

〈父(ちち)仁明天皇(にんみんてんわう)の死(し)を哀(かな)しんで出家(しゅげ)したというこの男(おとこ)、――

父(ちち)が寵愛(ちゆうあい)していたというだけあって、なかなかの人物(じんぶつ)であ

ることよ)

時康親王(ときやす)は、こう感じ取(と)られたのかも知(し)れない。

こうして遍昭(へんしょう)は、この後貞明親王(ごたいめいしんわう)(陽成天皇(ようせいてんわう))や時康親

5,404^P

王(わう)(光孝天皇(こうきょうてんわう))の護持僧(ごじそう)として仕え、光孝天皇(こうきょうてんわう)の殊遇(じゆぐう)によつ

て栄達(えいたつ)することになる。(「小野小町歌(おののこまちうた)」小林茂美(こばやし しげみ)、桜楓社(おうふうしゃ)

二二七―八頁、二五九頁参照)

このような背景(はいけい)を考え合(あ)わせてみると、……先(ま)ず最初(さいしょ)

に《小町(こまち)と遍昭(へんしょう)との間で『贈答歌(そうとうか)』が取り交(か)わされた所(ところ)

は、布留(ふる)の『石上寺(いそのかみでら)』であつたらう、と推察(すいさつ)される。(お

いおい詳述(しょうじつ)したい)

また、今井源衛氏(いまいげんゑし)も指摘(してき)しておられるように、

「岩(いわ)の上に旅寝(りよね)をすれば」

という小町(こまち)の歌(うた)との呼応(こおう)を考える時(とき)、舞台(ぶたい)が京都(きょうと)から離れ

ている方が、歌詞(かし)の『旅寝(りよね)』にふさわしいことは、いうま

でもない。(「小野小町歌(おののこまちうた)」小林茂美(こばやし しげみ)、桜楓社(おうふうしゃ)、二五九―二六

〇頁参照)

小町(こまち)と遍昭(へんしょう)の贈答歌(そうとうか)(石上寺(いそのかみでら))

望(のぞ)みは、仁寿元年(にじゆねん)(八五二)正月頃(しんげう)のその日(ひ)、ずい分(ずいぶん)

あちこちを訪(たず)ね歩いてきたのであろう。

日は短(みじ)くて、もう暮(く)れようとしていた。

とはいへ、そんなに急(いそ)ぐ旅(たび)ではないので、――この布留(ふる)

の『石上寺(いそのかみでら)』で一(いち)夜(や)を過(すご)し、夜(よ)が明(あ)けてからまかり帰(かえ)ろ

う、ということになった。(以下、国歌大観(こくかたいかん)所収(しゆしゆ)『後撰和歌(ごせんわか)

3
5,440
5,446
5,405

集』。流布本系（群書類従本）『小町集』参照

つまり、初めからこの寺に泊まるつもりでやってきたの
ではなかった。

と、そのとき、ある者が、

「此寺で遍昭（すなわち良岑宗貞）とばったり出会いまし

と告げた。

篁は、仁明天皇の御代に親しくしていた良岑宗貞をなつ
かしく思い、……無理に頼んで、遍昭を呼び寄せた。

二人の話は尽きなかった。

そんな時、和歌に興味を持ち始めていた小町は、

〈物いひ心みむ〉

と思い、筆に墨をふくませると、こう書いた。

岩の上に旅寝をすればいと寒し

昔の衣を我にかさなむ

・なお、『古事記』の「国生み条」に、

「石を訓みてイハといふ。下これに效へ」

とある。（第六十五章〈野見宿禰〉の項において既述）

小町は、機智をきかせ、

『石上』の地名を、『イハノウク』と訓んで、この歌を作っ

た。

(第13卷) 62

と解される。

・また、

「昔の衣は、僧侶・隠者の粗末な衣服のことである」

という。（「広辞苑」〈昔の衣〉参照）

小町は、上の句の『岩の上』に対応させて、下の句で

『昔の衣』と詠んだのだった。

・つまり、小町は、

『石上（イハノウク）に旅寝をすれば、（厳寒のこの時期）

非常に寒うございます。僧衣（昔の衣）を私に貸していた

だけませんでした（うか）

と歌ったのだった。

篁の孫娘から歌をもらった遍昭は、にっこり微笑んで、

返歌をしたためた。

世をそむく昔の衣はただ一重

貸さねば疎しいぞ二人ねむ

「寒いから僧衣を貸してほしい」という小町。「僧衣は一

枚しかない。かといって、貸さなければ薄情者になるだろ

う。いっそのこと、私と一緒に寝ましようよ、可愛いお嬢

さん」

といったやりとりなのであるうと思われる

この時、仁寿元年（八五二）正月に、篁は五十歳、遍昭

は三十六歳だった。そして、小町は十一歳であつたろうか。

ところが、この贈答歌について、次のような見解がある。

*

①この話を仮りに史実とみとめた場合、その詞書からすれ

ば、それは遍照の出家（嘉祥三年・八五〇）後まもなくの

出来事と解釈できる。詞書にいう石上寺と、歌にいう「岩

の上…」の呼応を原形とみなし、また出家の翌年（八五一）

のことと考へ、前田善子・角田文衛両氏説（弘仁十一年

（八二〇）小町出生説）に従うと、遍照は三十六歳、小町は

三十二歳の時となる。歌の内容から推しはかられる遊戲心

理からみても妥当のようだ。

②横田幸哉氏の天長三年（八二六）出生説だと小町は二十

六歳だが、当代の女流氣質からすれば、この程度の戯れっ

けは充分に發揮できたであらう。

③が、岡一男氏の承和元年（八三四）出生説にたつと、小

町十八歳の時となつて、歌のイメージにそぐわないという

懸念が残る。

④小町の誕生が承和八年（八四一）であれば、遍照と歌問

答した八五一年には十一歳の少女になる。いかに天性の才

女でも、三十六歳の遍照を相手どるにはませすぎている、

5406^p

63
36x
11x
25x
年

という。（小野小町攷「小林茂美、桜楓社、四五〜四六頁参照）

・なるほど、こうした見解のように、

〈小町と遍昭との贈答歌を、ただ単なる言葉の上だけのた

わむれの歌である〉

とみることも出来よう。

すなわち、小町と遍昭とが、

〈機智をこれ見よがしに鑲めた戯れっけばかりの言葉の遊

びの歌を贈答して、愉悦感にひたつた〉

とも解釈できよう。

・けれども、

〈果たして、本当にそうなのだろうか〉

と疑問に思われる。

・もしもそうだとすれば、

〈一大発心して僧となつたはずの遍昭が、出家した翌年に

はもう女性の魅力的な艶かしい誘惑に負けて、僧の身であ

るにもかかわらず、——たとえばんの言葉のあやだとして

「共に寝たい」

と歌つた〉

ということになつてしまつたのである。

・また、小町も遍昭も、平安朝初期當時を代表する歌人で

あって、——一人が詠んだどの歌にも、馥郁とした高雅な

香りがある。

〈その二人が、品格のない、言葉の遊びにすぎない低俗な

歌を作りおった〉

などとは、到底首肯し得ない。

●それに、恐らく、

〈僧になっただばかりの遍昭には、未だ『言葉の遊びを楽しむ

む』という余裕など無かったであらう〉

と思われる。

それは、仁寿元年（八五一）正月からわずか二ヶ月後の

三月二十一日（仁明天皇の御喪があげた時）に、遍昭が作っ

た次の歌からも推しはかれるのである。

みな人は花の衣になりぬなり

昔の袂よかわきだにせよ

〔大意〕人々はみな忌明けとともに花やか（華やか）な着

物に戻ったとはいえ、私はあの時以来黒装束のままである。

だが、私の衣の袖よ、その涙がせめて乾きでもしておくれ。

〔古今集〕卷第十六—八四七。「大和物語」第一六八段参照）

遍昭は、年が改まり、そして喪が明けたにもかかわらず、

まだ、——仁明天皇の死を悲しみ、なげき暮らしていたの

である。だっただっ

5,407^p

それが、遍昭の真の姿であつたに違いない。
なお、この歌については、追って詳述したい。

*

あるいは、
〈小生意気盛りのこの年頃の娘にありがちなように、いっ

「寒いから、僧衣を貸してほしい」

と、人の心を探るような歌（心みむ歌）を作った〉

のかも知れない。

なお、先に述べたように、仁寿元年（八五一）正月当時、

●篁は、五十歳

●遍昭は、三十六歳

●小町は、十一歳

であつたろうと思われる。

小町は、祖父篁と睡まじく語りあつてゐる遍昭の様子を

見ているうち、……いつしか、その若い僧に対して『お兄

さん』といった好感を抱き、親しくも歌を贈つて返歌を求

めたのではないだろうか。

ちよつと目には何とも大胆であり、あつかましいように

も受けとれるが、——しかし、人なつっこさが感じられる

この歌をつくつてよこしてくれた小野篁の孫娘小町を見る

5406^p
851 50
802 1
49 49
841 1
10 10

と、たしかに、かねてより噂に聞いていた通りのなかなか

の美少女だった。

〈ああ、この子が小町という娘御か〉

とはいえ、どのように見ても、まだまだあどけなく可愛

らしい乙女であった。

その愛らしい様子に、――遍昭は、ふと思いついた

ずら心から、つい、からかい半分、かわいさ半分で、

「いざ二人ねむ」

と歌ったように思われる。

篁の孫娘小町が、愛くるしく、しかも親子ほども年が開

いていたからこそ、……遍昭は、僧の身であるにもかかわ

らず、心ほだされる思いで、このような屈託のない歌をつ

くって答える気になったのだらう、と推察される。

*

小町と遍昭との贈答譚は、『後撰和歌集』(卷十七・一

九五・一九六)・『大和物語』(第一六八段)・『遍昭集』・

『小町集』のそれぞれに採録されている。(以下、「小野小町

攷」小林茂美、桜楓社、二二五―六頁参照)

■国歌大観所収『後撰和歌集』には、こう記されている。

いそのかみといふ寺に詣でて、日の暮れにければ、夜明

けてまかり帰らむとて、とどまりて、此寺に遍昭待りけ

5,408^p

65

ると人の告げ侍りければ、物いひ心みむとていひ侍りけ

小野小町

岩の上に旅寝をすればいと寒し

苔の衣を我にかさなむ

かへし

世をそむく苔の衣はただ一重

貸さねば疎しいざ二人ねむ

■流布本系(群書類従本)『小町集』の詞書も『後撰和歌

集』とほぼ同じである。ただし神宮文庫蔵『小野小町集』

では、相手が「そせい法師」(遍昭の子、素性法師)、その

歌の第一句は「よをさむみ」となっている。

■『大和物語』第一六八段や、その影響を受けてととの

たと見られている現在の『遍昭集』では、良岑宗貞少将の

色好み・出家・諸国修業・寺院での夫婦の邂逅(思いがけ

なく出会うこと)その他の内容をふくむ長い物語のなかに、

小町と遍昭との贈答譚が入っている。

『大和物語』第一六八段中の該当部分を掲げておくことに

しよう。――もしかしたら、小町が宮中に上った後の話な

のかも知れない。

小野の小町といふ人、正月に清水にまうでにけり。行ひ

などして聞くに、あやしう尊き法師のこゑにて読経し陀

148

5439

(ニ)

あ 5405

あ 5405

羅尼よむ。この小野の^こ小町^のあやしがりて、つれなき様に
て(何^{なに}気^げないふりをして)人を遣りて見せければ、「衰^ち一^{いつ}
つを着たる法師の、腰に火打筒(火打石やほくちを入れる
小箱)など結ひつけたるなむ、隅にゐたる」といひけり。
かくてなをきくに、聲いと尊くめでたきこゆれば、た
だなる人にはよにあらじ、もし少将大徳(遍昭のこと)
にやあらむとおもひにけり。「いかがいふ」とて、小町
が「この御寺になむ侍る。いと寒きに御衣一つ貸し給

く」とて、

いはのうへに旅寝をすればいと寒し
苔の衣をわれにかさなむ

といひやりたりけるかくりごとに、

よをそむく苔の衣はただ一重

かさねばつらしいぞ二人ねむ

といひたるに、小町は「さらに(いよいよたしかに)、少

将(遍昭)なりけりとおもひて、ただにも語らひし中な

れば(かつて親しく話を交わした間柄なのだから)、あひて

物もい(はんと)思ひていきければ、かい消つやうに失せに

けり。…^{はさ}恐らくその後のことであろう」一寺(長谷寺

か)求めさすれど、さらににげて失せにけり。かくて

失せにける大徳なむ僧正までなりて、花山といふ御寺

5,409

(京都市山科区北花山町の花山寺。別名、元慶寺。遍昭の創
建にかかる「広辞苑」にすみたまひける。云々。

とある。

小町は、

《清水寺の隅に居るといふその法師は遍昭だろ》

と思いつつも、はつきり確認する為、あの「いはのうへに

…」の歌を送ったように解される。

はたして、その返歌には「よをそむく……」とあった。

しかし、遍昭にとつて、いま小町と会つて話をするのは

くつらいことだったのである。

遍昭は、かき消すように失せてしまったのだった。(後

述)

『遍昭集』は、『大和物語』と大同小異だが、初瀬寺

(長谷寺)での出来事とする点が違っている。(後述)

*

それにしても、幼い小町が作った歌は、遍昭・篁・良実

らを驚かせるのに充分なものであった。

石上という所で、旅の一夜を明かそうという折

岩の上に旅寝をすればいと寒し

苔の衣を我にかさなむ

と歌ったのである。

なお参考迄に記せば、『小倉百人一首』で有名な、

やすらはで寝なましものを小夜ふけて

かたぶくまでの月を見しかな

の歌は、赤染衛門（二条天皇の中宮彰子（藤原道長の娘）に
紫式部と共に仕えた女性）が十三・四歳のころ、姉に代わっ
て詠んだものらしいという。（宮廷を彩る才女」暁教育図書

（例、七三頁参照）

歌才のある者は、十代前半で後世に残るような歌を作る

ものなのかも知れない。

*

日が暮れてゆく。

幼い小町との贈答歌の出来ばえは満足のいくものだっ

た。すっかり気をよくした遍昭は、——ここに、石上寺の

近くの母の家へと篁らを案内していった（とされている）。

遍昭の母親は、上品この上もないあたたかい笑顔で、客

人らを迎え入れてくれた。

質素ながらも夕餉のたんらんは楽しくうちとけて、話も

はずみ、笑い声が尽きなかった。

やがて遍昭が、こんなことを言い出した。

「母は、仁明天皇の第三皇子時康親王の乳母だったのです

よ」

5,410^p

69

篁は言った。

「うむ、あの皇子は、本当に学問のお好きな方ではないっしや

る」

「その時康親王が、昨年の秋、布留の滝を見においでになっ
て、この母の家をお訪ね下さったのでした」

「そんなんですよ。お小さかった皇子が御立派になって私
を訪ねて下さいますね。嬉しくて嬉しくて、泣きたくな

るほどでございました」

遍昭の母親はそういつて、あれこれと一部始終を語った。
その語り口は滋愛に満ちており、目もとには優しさがある

れていた。

小町は、……遠い田舎に残してきた乳母のことを思い出

していた。

そしていつしか小町は、やさしい乳母の胸に抱かれてい

るようなやすらかなさを覚えながら、深い眠りにおちてい

た。

乳母と

次の日の朝篁らは、遍昭の母親に厚く礼を述べ、別れを

惜んで、帰途についたのだらう。

篁・良実・小町の一行は、舟で布留川・泊瀬川を下り、

牛車で大和川沿いに難波へ出たのち、……淀川の流を溯つ

て帰京する予定だったのかも知れない。

大和守小野良実の任地であった大和国は美しかった。西

方正面に立田山（龍田山）があり、その上に白雲が立ち昇つ

ていて泊瀬川の川面にそれが映っていた。

その時、誰かが歌い出した。

海の底奥津白浪立田山

何時か越えなむ妹があたり見む

（万巻一八三）

「立田山を何時越えるのであろうか。早く妻の家のあたり

を見たいものだ」

なお、「海の底奥津白浪」は、立つ・立田山を導く序

（序詞）である。（『萬葉集事典』佐佐木信綱、平凡社、九五頁。

「萬葉集」）日本古典文学大系、岩波書店、万巻一八三の注

（参照）

そして、

風吹けば沖つ白浪たつた山

夜半にや君がひとりこゆらん

などとも歌われている。（『伊勢物語』二三段。「大和物語」

一四九段。「古今集」卷十八・九四参照）

■因みに述べる、『万葉集』の次の歌に「立田山」（龍田

5,411 P-1/2

山・多都多夜麻・多都多山・多都多能山・裁田之山）が詠みこまれている。

万巻一八三。五一八七七。六一九七一。七一八二。

九一七四七。九一七四九。十一二九四。十一三二二

一。十一三二四。十一三九四。十五一三七二。十七一

三九三一。二十一四三九五。

■大和国の『立田山』（龍田山）については、現在、次の

ように解説されている。

「大和國生駒郡三郷村の西なる嶺。信貴山（四三七呎）の

南に接し、河内國中河内郡堅上村に跨る。いわゆる龜瀬越

の山嶺なり。是を『暗峠』（大和國生駒郡南生駒村から河内

國枚岡に越える山路）のこととするは誤れる事、上田秋成

之を弁ぜり」

という。（『帝國地名辞典』太田爲三郎、名著出版〈龍田山〉

〈暗峠〉参照）

■もっとも、信貴山の南麓一带に、特に目立つ山は見当ら

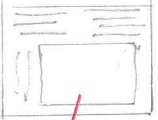
ない。また、五万分の一地図等の地図を見ても『立田山』

（龍田山）の記載が無い。（『写真図版796』信貴山・南麓）

●つまり、古来数多くの歌に詠まれてきたというのに、そ

の名高い山『立田山』（龍田山）がどの山のことなのか、

現在では明確でないようである。



右頁の右側
上・下段にわたって、大々にはかいて掲載下す。

69頁 1/2
↓

(第13巻)



5,411² 3/2

1204 1304 1404

信貴山 (437m) およびその南麓一帯

奈良県の山 (28) 小島 詠子 山と溪谷社 2002年3月1日 (改訂第2版) 発行、13頁参照

左側に尾根の隆起部、および朝護孫子寺 (信貴山縁起終巻を所蔵) が見える。

手前側の起伏のそばに山麓あたりを、立田山と呼んだとは考えにくそうである。



写真図版6 肥後国の『龍田山』(151.6^{たつたやま}ル) および『白川』^{しらかわ}

- ・熊本市街地(明午橋^{めいごぼし})から、北東方向を望む。
- ・子飼橋^{こかいばし}が見えている。左側手前には、藤崎八幡宮^{ふじさきはちまんぐう}の森がある。

松崎順子さん、平成21年6月撮影